

【雲が教える梅雨明け】

日本には雨期が3回ある。一つはお馴染み梅雨前線に伴って降る雨、二つ目は台風と秋雨前線よる雨、三つ目は冬の日本海側の雪である。

日本の一年間の降水量の平均は約1,700ミリで、世界平均のおよそ1.7倍にあたる。わが国は豊かな水の国・農業に最適な国といえる。

関東以西の地方における梅雨期の降水量は、6月下旬から7月上旬にかけてが最も多く、量的、回数的にも西に多く、東の地方で少ない傾向にある。

東日本では極端な大雨は少なくても、高温多湿の気象状態が続くので、稲や野菜の病気に注意が必要だ。

梅雨末期の集中豪雨や大雨に対する周到な準備も大切だ。

この期間は、1年のうちでもとりわけ、お天気のチェックが大切といえる。

ところで、この時期関心の高い梅雨明けを知るヒントが身近な空にある。

観天望気の一つに「**巻雲が西に流れると梅雨が明ける**」がある。日本の上空は、通常強い西風（ジェット気流）が吹いているため、天気が西から東へ変わることが多く、雲も同じような動きをする。

ところが、夏の太平洋高気圧の勢力が次第に強くなって梅雨が明けると、上空まで発達した高気圧の影響で、ジェット気流はサハリンまで北上し、日本上空の風は東に変わり、巻き雲が西へ流されるようになる。

もし、梅雨末期の頃に晴天が現れても、巻雲が東に流れているときは、梅雨の中休みのケースが多く、真夏の農作業はもう少し先にした方がよい。

（ 気象情報システム株式会社 高津 敏 ）